Prologue プロローグ

は、案内された部屋でぼんやりとをついていた。

　今日はゆっくり休んで、と案内された部屋はびっくりするくらい豪勢だった。

　歴史を感じさせる調度品が、生活用品として当たり前に使われている。技術的な最先端の目新しさではなく、年月を感じさせる重厚さは現代っ子の彼女にはなじみが薄い。案内されるまでに歩いた城内の威容に圧倒されてしまった。

「異世界、かぁ……」

　自分のいる場所がどこかをいてみたが、まったく実感はない。

　なんでも灯里が召喚されたのは、グリザリカ王国と呼ばれる国らしい。当たり前だが聞いたこともない国名だ。地球にだって灯里が知らない国はいくらでもあるのだろうが、魔導なんてものを自分が使えるようになっている事実を自覚させられては、異世界に来たんだということを否定することはできなかった。

　こちらで出会う人はみんな優しかったが、灯里からすれば周りの対応など評価している場合ではない。

　日本での自分の取り扱いはどうなっているのか。召喚なんかされてしまったが、元の世界に戻れるのか。父や母は──どうせ、に家に帰ってこないからいいとしても、学校に行けないのは嫌だ。休んでいる間に授業に遅れたくないし、ましてや出席日数が足りなくなって留年など言語道断だ。

　なにより。

　教室にある空白の席が、灯里のをよぎる。

　あの子が戻ってきた時に自分がいなかったら、どうしてくれるのか。

「はぁ」

　重苦しいため息が出る。ぎゅうっと手のひらを握りしめる。解消の当てのない不満が胸にたまっていく。世界が変わるという展開に、心がついていけていない。

　どうしようもない閉塞感に、灯里はちらりと窓辺に目をやる。

　しの色合いが薄くなっている。そろそろ夜になるいだ。

　普段ならば学校から帰宅して自分の部屋にいる時間。日本での自分は、一番の親友とよくメッセージアプリでやり取りをしては夜更かしを繰り返した。彼女がいなくなった後は、メッセージが来ていないかどうか確認をするのがになった。

　スカートのポケットに手を入れて、そこになにも入っていないことに改めて気がつく。

　ポケットの空虚さに身がすくんだ。

　いまの灯里はこの広い部屋に、とつながることもなく一人でいる。

　こんな世界にいては、当たり前の日常すらない。自覚させられた孤独の恐怖をごまかすようにして苛立ちがく。

「バッカみたい」

　なにが異世界だ。

　部屋の狭さに嫌気が差した。日本で住んでいた自分の部屋よりずっと広いのに、無性に息が詰まる。

　空気を換えるために立ち上がり、窓を開けてバルコニーに出た瞬間だ。

「へ？」

　メイド服姿の女の子が空から降ってきたかのように、ふわりとに着地した。

　西日に溶けてしまいそうなほど淡い色の栗毛をスカーフリボンでくくった、きれいな少女だ。彼女の姿を見た瞬間、灯里は目をまん丸にして身を乗り出した。

「は──ちゃん!?」

　日本で突然、知れずになった大切な友達にして、クラスメイト。

　この世界に来て出会った美しい少女は、時任灯里の一番の親友と同じ顔をしていた。